

追憶

徳永直

一

関東大震災の九月一日が、こんどでもう二十四回めになる。忘れぬうちに書いておきたいと心がけながらも、まる二十三年が経ってしまったわけだが、かんたんにいえばなかなか書けなかった。戦争中にくらべれば多少は検閲がらくであった昭和の初期でも、伏字くらいですむ性質とも思えなかったし、昭和七、八年以後となると、書いてしまっておくことさえいざという場合が考えられてこわい気がしていた。それでも永い年月のうちには、大杉栄、伊藤野枝の一家族が殺され、私もいくらか知っていた平沢計七や、川合義虎や、山岸実司（姓はたしかだが名は確かでない）や、ほかたくさんの革命的労働者が殺され、またおびただしい朝鮮人諸君が殺されたことなど、一応あきらかにされた。しかし大杉一族を殺したのが憲兵大尉甘粕正彦一味のしわざであるとして、平沢

計七ほかたくさんの労働者を殺したのがいわゆる「亀井戸事件」であるとして。または朝鮮人諸君の遭難が「朝鮮人ぎやく殺事件」であるとして、つまり日本人の大多数には、まだそれらの出来事を、あの大きな自然の災害にあたって、ぐうぜんにおこった個々ばらばらなとぼちり——という以上には理解されていないようである。

のちの議会で永井柳太郎が、当時朝鮮むけの電報が、なぜみんな下関で抑留されてしまったか？ という時の山本権兵衛内閣への質問も、まえの陸軍大臣山梨半造が、同じ内務大臣水野練太郎にせまって、勅令による「戒厳令」にせよとせまったとかいう噂も、ただそれだけのこととしてうけいれられたようであった。いやうけいれるようにされたのであった。

たとえば大震災後から十余年をへた、昭和九年刊富山房発行の「国民百科大辞典」でさえ、「かんとうだいぢしん」の項には、まったく経済科学的な面だけを説明して

いて、政治的な出来事にはみじんもふれていないばかりか「かめんどじけん」の項もめつからぬし、ましてや「ちようせんじんぎやくさつじけん」の項はない。こうした政治的圧力による歴史のまつ殺は、いきおいそれとつながりその他の出来事をもおおいかくす。大震災後、いちやく、救恤品を山とつんで日本の海にあらわれたソ連の船は、罹災した日本人民の意志を無視しておいかえされた。アメリカの船がつんできたおびただしい救恤品のうち、おそらくは無料であつたとおもわれる冬オウバアなどが、私ら罹災者には当時の貨幣で十五円で買わされた。裏地はあらわい格子模様の、裾は足りびまで、袖は手ぶくろがいらぬくらい長いのをきて三ヶ月月賦でたてかえてくれた工場へかよつたのであつたが、こういう海をこえてきたソ連の民衆や、アメリカ民衆のころころざしのあたたかみも、うんと割びきされたり、カットされたりしたもの、日本民衆のころころのうちにだけ、かすかにのこつただけである。

歴史もしよせんは相対的な力関係でえがかれる。当時の「戒厳令」を執行した陸軍大将「ふくだまさたらう」の項には「大正12・軍事参議官、関東戒厳司令官。大正

14・待命予備役。昭和5、枢密顧問官、戦功三依り勲一等旭日大綬章功三級。特旨ニヨリ従二位。昭和7・六月歿(67)」とあつて、大杉一家殺しも、かめいどじけんも、ましてや数千人にのぼる朝鮮人虐殺の責任者としては一句もかかれてはいない。したがつて大杉の同志であつた和田久太郎が「ふくだまさたらう」をねらつて狙げきしようとした一件も、つかまつてたちまち死刑にされた出来事も、つまり「わだきうたらう」の項は、百科辞典のどこをさがしてもめつからぬのである。

しかしまた、歴史はしよせん最後に勝利するものがつくるのだ。百科辞典にはなくても、新聞記事にそうあらわれなくても、日本のひろい人民のうちにはちりぢりの形ながら保存されている。たとえば「かめんどじけん」のカットされない記録は、当時の革命的文学者たち「種蒔く人」の同人らによつてつくられた。犠牲によつて誕生したその四六判の小冊子は、鉄のくさりでかこまれた図柄の粗末な表紙であつたと記憶しているが、押収されたのこりのわずかが、いまもどつかにある筈だ。平沢計七たちの死骸の写真もあるということだし、和田久太郎についての記録も、おそらく当時の人々の手に保存され

ているにちがいがなく、日本ブルジョアジーみずからの恐怖からくる、故もない流言ゆゑによって、数千の同胞をうしなつた今日の朝鮮人諸君のうちには、もちろんおもしろであらたにする記録があるであらう。

私たち日本人は、日本人のたゞしい民族的發展のために、それらをあつめていつわりない歴史をつくらねばならぬ。朝鮮の人民を殺した日本人の責任はまだ消えておらぬ。この責任を果すには日本人が日本人の手で、それが誰によつておこなわれたかをあきらかにして、罪の所在と原因を決定したときだ。一亀井戸署長が左せんされたとか、甘粕元大尉が刑務所に服役したとかいうことだけで、大震災事件全体が完了する筈がない。もちろん「戒厳令」のときの陸軍大臣田中義一は死んだ。福田雅太郎も故人である。また「戒厳令」の命令者大正天皇嘉仁王もこの世にはない。しかしいつわりの歴史がまだあらためられず、日本の革命的労働者や、朝鮮の不幸であつた諸君の死が、日本人によつてたゞしく認められぬかぎり、けつして「時効」にはかからぬであらう。

.....

二十三年前の九月一日の正午どき、私は小石川博文館印刷所の「ポイント科」とよばれる新工場の二階ではたらいていた。露天運動場までいれて四階になる鉄筋コンクリの建物はまた新しく、二階の私たちは植字場、文撰場、解版場などあわせて百七十八人もいたろうか。おひるのために使屋つかいの子供たちが仕事台のあいまの板ばりに箆むしをしいたり、手洗いの水をバケツに汲んできてうしろへおいたりする。そんなザワついた瞬間だったが、初震がきたとき、ちよんど組みあがつた版かを糸で結むすにかけていた私は、おもわず両掌りょうてでおさえながら、

「止せやい」

とどなったのをおぼえている。講談社の「婦人倶楽部」のいわゆる旧頁版で、小咄こはなしなどを六号ルビ付で五段ぐみにする。ケイかこみのうえにコマ絵のような凸版挿絵がいくつもはいるめんどうな版かだった。しかしたちまち私は版かを両掌でかばいきれなくなつた。みあげている白い天井、三尺に二尺も厚みのある梁はりの凸起とつきまでがグイ、グイとうごく。職長台のある広場で、そこまでかけてきたルビ屋の女たちが四五人、ぶらんこにのつたみたいな姿勢になつて、抱きあつたままへたへたとくずれてしま

ったのもみた。きれぎれなろんな叫び声があった。しかしみんなも逃げだす暇がなかったように、私も仕事台のかげにしゃがみこんだだけだった。白い天井の梁にそうて黒い筋がはしった。たちまち裂けめがひろがりのびていった。夢をみているようだったが、とたんにゴトツとからだにこたえるような音がして、あたりは天井から降ってくる防火砂でまっくらになった。ガ、ガアッ——という、それは音とはいえないようなもの——がして、からだがどつかへ陥おちこんでゆく。そのへんまでしかおぼえていない。気が遠くなってしまったのだが、その瞬間はつきり頭にうかんだことは、つぎのようなことだ。

——これで死ぬんだなア。おかみさんもたないで死ぬんだなア——もちろん二十五歳の私はべつに恋人があつたわけでもなかった。

気がついたとき、何がきつかけで気がついたかおぼえぬが、怖くて眼があげられなかった。手を交かわる交かわるもちあげてみ、それから足をさわってみて二本ともあるのがわかると、急に水面にうかびあがつたように意識がはつきりしてきた。眼をあげたがくらくて何もみえなかった。おそろしい叫び声をする。洞穴のようなすき間を縫って、

呻うめきと悲鳴とがたらぬいてくる。少しばかりのすき間を手さぐりすると、足が一本つきでいて水だか血だかながれている。足にはいている仕事足袋の手ざわりで、私の隣り台の「竹さん」だと知ったが、もちろんとつくに死んでいて返事はなかった。

私はすきまをもれてくる微かすかなひかりの方へはいだした。地震はつづいていて、ひかりは明めつし、隙間は広くなったり急に消えてなくなったりする。正氣づいてから光のなかへはいだすまでどれくらいかかったか？ あるところで植字工のF（これはのち助かった）がもがいていた。私はくずれた仕事台の間から彼の足をひきだしてやった。するとこんどは右の腕が付根つねのへんを梁におさえつけられていた。またくらくらなってきた私は逃げだした。そしてようやく二階の窓だったとおもわれるところにでると、そこから地べたまで、またぐことができた。しかしもつとおどろいたことは、すぐ向むかい側の、この大工場の建物のうちで、一等のおんぼろ工場といわれている修繕工場の木造建が、かぶりをふりふりゆれながらもちゃんと建つてることだった。構内見渡しても煉瓦建れんがだての工場も洋式建築の事務所も、どこもちゃんと建つてる

ことだった。

「なにをボンヤリみてやがんだ、早く……」

私は何かめちやくちやにどなったようだ。じつさい修繕工場のまえには、十人ばかりだったが、蛙のようにひしゃげてしまった工場をみて、呆気にとられている連中がいたのだ。私は沢山しゃべったうちに「ジョッキだ・ジョッキだ」と叫んだことをおぼえているが、小さいジョッキくらいでどうなるか、という考えはうかばなかったのだろう。気がついたように連中がうき出したとき、私は一散に伝通院の坂をかけたのぼった。一つは咽喉がかわいているためであったが、一つはもう止めどない恐怖心であった。せまい両側の家々の戸外にいる内儀かみさんたちが、びつくりして、私をよびとめた。私はそのとき気がついたのだが、シャツ一つの私の背から血がしたたつていて、さるまたにまで染まっていたのだった。

「ポイントが、つぶれた——」

と、私はひしゃくごと水のみながらいうと、さいしよはボンヤリしていた内儀さんたちのうちにいるんな叫びが一度におこった。「あ、あ、おらんちの……」「えい、ほんとかえ？」

私は伝通院の墓地へかけた。私よりはやくはいだした仲間が二三人、そこらの樹木に抱きついていて。私も桐の一本に、どういうわけか二の枝へんまでのぼってしまつた。そしてそんな目的ではなかつただけれど、そこからは偶然、左は神田、お茶の水へんまで。右は早稲田から、目白の高台の方まで、よくみえた。さいしよお茶の水よりもっと左手に、黒い煙がスツとのぼった。風がなくて線香の煙のようだった。するとこんどは正面の牛込の方角に、これはつづけて二三本、スツ、スツと黒煙がのぼった。とおもううち、左手に五本、八本と新たな煙がのぼった。消防自動車のサイレンがあちらこちらでひびきはじめた。煙はみるみる数がふえて、さいしよの煙はしだいに大きくなり、赤味をおびた乳色にかわつてゆく。

「そうだ、火事だ」

そのころになつて、やつと私は納得した。そして地震と火事が、どうれんらくがあるのか、それまで考える力はもたなかつたけれど、こんどはふツと、いま逃げてきた工場のことをおもいだした。

私はまた伝通院の坂をかけおりにいた。工場の仲間の

悲鳴や呻き声が急によみがえってきたのだが、しかし私はまだ私たちの工場が何であんなに早くつぶれたか？ 鉄筋四階の新建築物が、アツというまもなくつぶれてしまったか？ ということの疑問はおこっていなかった。

二

一日の晩、私は小石川植物園の池のちかくにある藪のなかでねていた。夜がふけるにつれてだんだんあたりはあかるくなつてゆき、空は赤銅色にそまつてくる。火は神田三崎町まできて、もう水道橋へうつつたという話声もあつた。藪のなか、池の周囲、築山(つとま)のまわり、森のなか、花壇やベンチのかけ。避難してくる人間が刻々にふえてくる。それに私たちのねている藪のなかは正門入口にちかいので、荷車や乳母車に荷物をつんだもの、病人をおぶつたもの、子供の手をひき泣き声で叫んでいる女など、ひしめきあいながらなだれこんでくるのが頭にひびくようだ。

「ここまで焼けてきやしないかね？」

私のとなりにはルビ屋の鈴木うめと川島タマがねてい

た。鈴木うめは真青まっさおになつていてまだ口がきけなかったが、川島タマは足をやられていた。おかしなもので、私もひるま死骸や重傷者はこびに手つだつていっているうちはべつに感じなかったが、医者にめつけられて、背の傷を肩からホウタイされて患者のうちにいられると、やはり痛みがでてきた。

新工場の即死者たちは私らのねている場所からは、正門からの通路をへだてたむこう側にならべてあつた。重傷者たちもすこしずつ病院をみつけてははこばれているようだったが、じつさいのところならんでねているものうち、だれが一番危険なのかよくわからぬようだった。だんぞくするいろんな呻きにまじつて、もう死人の匂いが流れてくる。池のふちには私らの工場の者ではない死骸の一つが、どういふわけか、頭の方を水につつんだ恰好でなげだされてあつた。

——とく、ながア、とくながア——

赤銅色がしだいに夕焼ゆうやくのようにつよくあからんでくる空、くれないの照りのうらはおどろな黒雲くろぐもがもりあがつてゆく空をみていると、いろんな叫び声のなかに、私の名をよんでいる声がきこえてきた。こつちでする返事は

きこえないらしくて、ゆきつもどりつした声が、それでもしまいには頭の上へやつてきた。

「おお、生きとったか」

「東京出版従事員組合」の組合員たちだったが、本部常任のY・Yは、うつぶせの姿勢でいる私にかがみこんでそんな風に云った。

「文館（博文館のこと）のポイントが全めつだつてきいたもんだからなア」

Y・Yのほかに三四人いたがおぼえていない。みんな印刷工で、連中は巢鴨の本部事務所にねおきしてるので「本部組」と云っていた。私はY・Yに、私たちの久堅支部のうち、私と同じく二階で即死したN・Hという植字工のことを報告した。私は久堅支部の責任者だったからである。しかし三十五六名の支部員ぜんたいの安否は、もちろんわかつていなかった。

「もう壱岐坂まで燃えてきている」

と、だれかが云った。

「春日町で止まるよ」

「止まるもんか」

するとY・Yが身体に似合わない大声でおさえつけた。

「いやアとまる——」

連中はあちこちで怪我人たちの世話をしていた。私たちのならんでいるすぐ傍の藪の入口に蚊帳かやがつるしてあった。なかで子供たちが泣いていた。余震がくると蚊帳ごとゆれて、なかで母親らしい女が子供と一緒に声をあげているのがみえたが、すぐそのこつち側、私の頭にちかいかん木ほくのかげで、植字工、M・Oが及川キヨという解版場の娘を、赤ン坊にしてやるように、両肢りょうあしをかかえて小便させようとしている。どこを怪我しているのかわからないが、及川キヨはまるでうごけなかった。それが娘らしい本能的な羞恥をもって全身でこばもうとしている。私と同じ二階ではたらいっているM・Oは久堅支部員だが、これはどこも怪我していなかった。まだ独身もので、かねては人前では口のきけない若者だが、しかしこのときはおそろしいほど腕力をだしてかかえあげながら、どなりつけていた。

「バカヤロ、きまりわるがることなんかねえつたら——」

ときどき担架がきた。病院がみつかりしだいにくるらしかった。担架をかつぐのはたんびに工場の仲間だった。

Y・Yと一緒にきた連中も担架をかついでどっかへ行っ

てしまった。支部員のうちでいま一人、S・Sがどっかの病院で死んだということが、Y・Yがいるうちにわかった。

「しかし、なんであの工場だけつぶれたんだい？」

Y・Yは低声で、私の顔をのぞきながらそんなことをきいた。——、ああそうだな——という風に、私もフィと疑問がうかびあがつてきた。

「じゃ、またくるからね。報告たのむぜ」

小柄で猫背の文撰工はかえっていった。また担架がもどつてきて、解版工の酒井ツル(?)がかつがれていった。だれかがうしろで云っていた。——病院までもつかねエ?——。

どれくらい時間が経つたろうか? 微震はふだんにつづいていた。紙のように白くなっている鈴木うめが唇をモガモガやると、私は池のところへいつて弁当箱のフタに水をくんできてやらねばならなかった。それはとにかく九月一日の夜のつづきにはちがいがなかったが、フィと正面の築山、池をこえたむこうの芝生の山のうえで、——みなさア——というような声が一ときわたかくきこえて、提灯ちようどんがひとつ、輪をかくように揺れうごくのがみえ

た。——ちよつと、……くだきア——。

その提灯は大ぶりの、まるい提灯であった。横に赤い線がひいてあった。在郷軍人分会がつかうマークの、あの山形のギザギザであったかどうか、それは明瞭な記憶ではない。しかし警察の二本の横の赤線に、タテに一本の赤線がある。あれとはちがつていた。

「……ちよつときいてくだきアい」

提灯の揺れが止まると、二つ三つの声が一つになった。そしてそのときは森のかげや、藪のなかや、築山のまわりや、園じゅうでは何万といる人群れの注意が、いくらかそつちを集つたようであった。

「……悪漢あつかんの……朝鮮人に要じんしなければいかん。……しよくんのそばに朝鮮人はいないか? ……放つけ火を……」

私のところからはよくきこえた。今日もおぼえている文句は、「悪漢」「朝鮮人」「放け火を」「しよくんのそばに」などであるが、その男の大きな声の演説は五分か十分の短いものだった。どんな風体ふうていかもおぼえていないが、夜とはいえ昼間のようにあかるいのに、提灯をつけて、荷物一つもたない男たちだったので、私らには異様に

感じられた。

「朝鮮人……気をつけるーウ」

まえの男がひとしきりしゃべってしまふまで、きゆうに呼吸をのんだようにあたりはしずかだったが、提灯がゆれながら築山をおりかけたとき、そのつれらしい声の一つが、一きわたかく、そう怒鳴った瞬間、いっぺんに火がつけられて、ザーッと風がおこつたようなさわわぎになつた。子供の泣き声。男たちのどなりごえ。きれぎれなさけび……。

足をひきずりながら川島タマがしがみついてきた。

「大丈夫だよ」

私は怪我人はみな工場のもので、朝鮮の人はいなくつたが、同じ藪のなかにはいるはずだった。私は植物園の堀一つむこうの長屋町の二階に住んでいたし、その長屋町にはわりにたくさん朝鮮人がいた。そしていまは長屋町じゅうが家をあけて、一ばんちかいこの藪のなかへひなんしてるからだ。

「本当かね？」

「嘘だろう」

私はそんな風に話しあつていた。信用できない気が

していた。

「いや——」

するとおこつた声で、蚊帳のある藪の入口の方で、荷車にのつてる男が叫んだ。もちろんそれは私たちにははなかつたが……。

「火をつけたにちげねえ。でなきア、東京じゅういっぺんに火事になるって法はねえじゃねえか……ちきしよ、おれんちの店は——へいになつちまつたんだ——」

池のむこうの丘になつてゐる木だちのなかで、一散に築山の方へかけてゆく人群れがあつたが、なにか短い叫び声が出たと思うと、女だか男だか、白いものがころがるように落ちてきて池のなかへとびこんだ。私のところからよくみえる蚊帳もひつちぎられた。そのあとへ子供を二人、両方にかかえた黒いチマの朝鮮人の内儀さんが真つすぐにつつたつていた。——怖い——と川島タマが叫びごえあげたほどだ。だれが蚊帳をちぎつたかわからぬが、子供を脇にかかえこんでゐる内儀さんの顔にあらわれている恐怖の表情——口を半分あけて眼をみひらいてゐる——は、藪の入口の荷車の方をみつめていた。荷車のかげで何があつたか私のところからはみえなかつた

が、すぐ顔から血を流している半裸体の男がこつちへとびだしてくると、何か叫びながら子供ごと内儀さんをひつさらうようにして、塀のやぶけめから逃げていった。

「止せ、止せ——」

「いや、やつつけとかなきや——ちきしよ」

「——どこへ行った？」

ひつちぎれた蚊帳や、ひっくりかえった飯びつのちらかっているあたりで、ざわめきがしばらくつづいたが、いくら落ちついたじぶん——こんな声もきこえた。

「だってエ、知ってる顔じゃねえか、可哀想かわいそうよ——」

だんだんあたりが白みそめて、灰ほこりをあびた人々の顔がしらちゃけてみえるじぶんに——朝鮮人が隊をつくって東京じゅう火を放っている——というようになうわさも私たちのところまで流れてきた。

二日の朝、私はおきて工場へ行った。ゆきがけに植物園の正門をはいつてすぐのところの人だかりがしていた。ちよつとのぞいたがみえなかつたので、そのまま工場の方へ行った——と記憶する。

「夫婦じゃないね、きょうだいだよ」

人だかりはそんな噂をしていた。——学生服を着た兄

の方が桜の樹きに背を凭もたせるようにして、洋装をした妹の方がうつむけになったまま両手を前につきだしている死体——そんな印象ものこっているが、これは或いはほかで見たものがダブっているのかも知れない。

三

二日、三日、四日……。一週間ばかりはつぶれた工場から死体の掘りだしや、活字や原稿のひろいあつめをやった。つぶれなかつた他の工場は、一応災害から避難した職工たちもどつてくると、私たちのつぶれた工場とは無関係に、三日ごろからドシドシ操業していた。

赤羽の工兵隊がきてから死体の掘りだしはハカどつた。このやくざな鉄筋コンクリートは逃げだすヒマもないほどもろくつぶれたくせに、壁に穴をあけるだけでも、容易でなかつた。ツルハシで叩くとなかには鉄網があつた。鉄網をきると砂がつまっています、また鉄網があつて、鉄棒があつた。

「ガンバレエ——よ」

「いますぐだゾーウ」

とおくで、かきなりあつた壁の奥で、なにか物音がすると、さけみに顔をおつつけた者が声援した。私たちは前後不覚になつてツルハシを振る。玄米の握りめしをししかくつてない私たちはそれでも若かつたからガンばることができた。兵隊のほかは家庭をもたないひとりものが多かつた。死体が全部掘り出されたのは四日目だつたらう。死体はみんなで四十いくつあつた。そのうちでも二階では女ばかりの解版場と、三階では校正室の連中が多かつた。一階の印刷室は逃げだせる可能性が多かつたというよりも、印刷機の凸起のかげで助かつたものが多い——という方が妥当だつた。あつたらおまんこやきばのこやし。——私たち若いものは疲れると、そんな文句を歌うようにどなりながらツルハシを振るつた。そして「おぎんちゃん」(姓はおもいだせない)の死体をほりあてたとき私たちは泣いた。「とらんべえ」でとおつているT・Sなどでばなしでオイオイ泣いた。おぎんちゃんほうつづせになつたまま、元結もとゆいがきれた頭髪かみを白い防火砂のなかに波うたせていた。彼女がついたちの朝きれいに銀杏いんげんがえしに結つてきたのを私たちは知っている。銀の丈長たけながをつけて工場へでてきた彼女をいちはやくみつ

けた私たちは彼女をおいまわしたのだ。「とらんべえ」など——その頭髪にさわらせなかつたら承知しねえ——といつて工場じゅうおつかけまわしたのだった。

「だいたい会社がよくねえ——」

そんな不満はさいしよ、「炊き出し」のことか何かではじまつたようだった。そして三日めごろから私も疑問におもつていたこと——何でこんなに早くつづれたか？ ということがみんなの間に大きな声でいわれるようになった。三日めあたりからは人も多くでるようになったし、それにいまひとつ、みんなを怒らせる話も流布された。それは社長が——死体の掘りだしよりか、活字の方が大事だ。さつさと拾え——と云つたというのであつた。果してみんなが話しているとおり社長が云つたかどうか、私は現場をきいたわけではなかつたけれど、Hという私たちの職長までが怒つていた。——ひでえこというよ、うーむ——。

しかしそんな空気も、三日、四日までは「ではどうしよう」という風にはならなかつた。何しろ「朝鮮人さわざい」の方が、みんなにとつて焦眉しやうびの急であつた。もちろん何が焦眉の急かもわからないけれど、とにかく地震の

恐怖火の恐怖、そのままの形で「朝鮮人さわぎ」へ発展していた。「荒川土堤どてに百人も針金で結ゆわえられて殺されていたよ」とか、「おれんちのおおや（家主）は三人斬ったんだって、すげえ刀をみたぜ」とか、「兵隊はみんな実弾をもってんだゾ」とか、そんな話の方が、すぐ打ちかかってしまう空気であった。そしてそういう空気のなかでは私たち久堅支部員、ことにその中心であった独身者ばかりの七八人は、「朝鮮人さわぎ」にたいして冷たんのようであった。べつにそのことで反対も意見もだした記憶はないのだが、私は私が室むろがりにしているうちの同じ植字工、福田というおやじに忠告されたものだ。

「なお（工場ではみなこうよんでいた）さんや、気をつけねえと、しゃけえしゆぎはあぶねエツていうぜ」

そういうわけもあつて、三日の晩だったかは夜警にでた。まえに云つたように私の居住は一方植物園のおそろしく長い塀にさえぎられたくらい片側町だ。二方は軒灯も少なくてちいさい路地ばかりある長屋つづき。どこから始まってどこで終わつてるか見当のつきようもないけれど、とにかく十間じゅうけんおきくらいに道路を縄でとーせんぼしながら、前の方から云つてくる指令を、つぎの非常

線へつたえるのだった。前の方、と云つたところで私もわからない。伝令がくる方は、すぐ近所の饅頭屋のまえにある非常線から、伝令をつたえにゆく方はこれも話ができこえるくらい近い質屋の門口にある非常線。つまりこれだけが私の知っている全部なのだから。何せかねてくらい通りなのに、その晩は電灯がつかかなかつた。

「でんれい、異常なし、終おわり」

五分おきくらいに饅頭屋の方から云つてくる。それでこつちはまた質屋のまえに行つて、——でんれい……終り——をくりかえす。だれが責任者で、一ばんおしまいの報告はどこにとどくのかもわからない。私は鞆さやのない刀をもっていた。尺八寸といういわゆる小刀らしいが、福田のおやじが持っているというからもっていた。

「報告」

伝令には、饅頭屋のじじいもきたが、むしあついのに黒い雨合羽あまがっぱを着ていた。このじじいは長屋町きつての金持のくせに、私たちの二階工場の掃除屋をしていたからよく知っていた。

「——てきは（てき、）という言葉をつかった。非常線をもぐつてしんにゆうするから、路地の入口に歩哨をたてよ。

終り」

文章語と口語とをまじえて云ってくるが、どの非常線もそんな「でんれい」のたびにざわつき緊張した。一人一人で手が足りないで大声でかりだして歩いたりした。

「でんれい」のうちには「女、子供に危害を加えられるおそれあり」という意味のもあった。しかし「てき」がどこからくるのか？ 非常線は何時間経っても猫の子一匹かからない。そのくせ「でんれい」はだんだんはげしくなっていくた。「でんれい」「でんれい」という声が殺気だつて、饅頭屋よりもつと前の線で云つてるのがきこえてくる。

「でんれい」

——こんどは饅頭屋のほかに二三人できた。

「——ただいま原町方面よりトラック一台にのつたてき
が、しんにゆうしつあり、各自せんとうよういすべし。
終り」

こいつはみんなおどろいた。せんとう用意と云つたところ
で、せいせい錆び刀をもっているくらいがいい方で、
たいていは棒切れである。みんなであわてていると、ど
つか路地の奥の方でさわぎがはじまった。「朝鮮人がつか

まったゾウ」という遠い声。

「なにッ、てきがしんにゆうしたか？」

と、いう近い声。私らの非常線からも二三人がかけだしてゆく。

「せんとう用意だ」「せんとう用意だ」と怒鳴つてあるくやつ。私もまった。どういうことになるんだろう？ すると路地奥から戻ってきた二三人の声々が云つている。

「死んだか？」「ばかだな、ありや桶屋のおやじじゃねえか」「みんな忘れたのかね、あの禿頭をさ。」

——するといま一つの声が打ち消すようにさげぶ。

「いや朝鮮人だ。日本語がうめえんだよ」——。

みなせんとう用意した。私はかけていって二階の自分の室へ行ったが、たしか帽子をかぶってきただけだつたと思う。何もあるわけがなかった。

「でんれいッ」

またきた。二三人の伝令が口々に云つた。意味はこうだつた。——原町方面を進行中のてきは朝鮮人が約三十人。「ばくだん」をめいめいにもっている。その三十人のなかには女が一人いて、それが頭目である。——かくじ、せんとうじゅんび、おこたるなかれ——。

少し舌たるい饅頭屋のじじいが「おこたるなかれ」というときの真剣な調子と、舌がもつれて咽喉をつりあげるようにして叫んだ顔を、私はいまおもいだすことが出来る。

いよいよだ。私たちはこんどは恐怖の方が勝つて少しンとしてきた。路地という路地がふるえあがつたように呼吸をのんでしまった。何時ごろだったか？ とにかく夜明けがちかいくらいだったと思う。十分経ち、三十分経ち、一時間経った。原町は私たちの居住から歩いても三十分とかならない距離であった。

「どつかでツカまったかな？」

「しかしだナ、めいめいにバクダンをもっているって、よくわかったね？」

ながい緊張のうちに考えていたやつがあつて、だれかそんなこと云った。「なるほど」と私も思った。するとまた「でんれい」が来た。

「原町方面のときはせんとうのち、ほりよにされた。そのとき押収したバクダンを、いま植物園内で実験するから、みんなおどろいてはいけない。終り」

みんなの疑問がなかばくつがえされた。「せんとう用意」

から解放されてホツとしながら、それでも何のためにこんなさわがしいとき、ばくだんの実験などするんだらう？ という疑問もおこらぬではなかった。しかしめいめいは路地の奥にかけていって、ばくだんの音におどろかぬように家族に告げたりするさわぎだった。

十分経ち、二十分経ちする間、いまに破裂するはずの音響をまっていた。ところが三十分経ち一時間経つて、もうあたりが白みはじめても何の物音もしなかった。

「でんれい——」

すると、こんどは逆に、質屋の方から「でんれい」がきて云った。

「——ばくだんの音がしないがどういうわけか？ 終り」私がこんどは伝令になって饅頭屋の非常線につたえた。こつちからの「でんれい」は行ったきりだったが、この非常線も動揺しはじめてるのがわかった。また質屋の方から五六人がゾロゾロやって来たが、こんどは「でんれい」という風に云わなかった。

「——いったいどつからでんれいはでているんかね？」

それでその五六人と一緒になつて、私たちも饅頭屋の非常線に行つて、同じことを訊いた。もちろんだれも知

らなかつた。みんな縄の非常線をうつちやつて、ぞろぞろと前の線へ前の線へと、人数を増しながら歩いて行った。

「すこしヘンだよ、ばくだんなんて」

「バカにしてやがる——」

「張本人」とか「さがしだせ」とか、口々にいいながら、氷川下の方までおして行つた。もうすつかりあかるくなつてきていて、みんな疲れて怒つた顔をしていた。そして氷川神社の近くまできたとき、私たちよりもつと多くの人間が、神社の鳥居とななめむかいくらいにあたる二階長屋のまえでひしめきあつているのだった。

「——だせ、そいつを——」

「——もう逐でんしたと……」

「いる、いる、かくれてやがんだ」

口々にさげんでいるのがきこえるが、前の方はいっばいで私らはすすまなかつた。しもた家の格子戸こうしどはあけはなしになって、なかにも人々がつめこんでいた。私たちはながいことそこへたつていた。しかし空家あきやらしい家のなかにはだれもおらぬようであつた。

「——ひでえ野郎だ、一ばんじゅう……」

「——騎兵曹長だとよ」

「騎兵？　へーい？」

どういふわけか、みんな二階をみあげながら、きれぎれにそんなことを云つていた。二階の雨戸はしまつていたが、人気はなさそうにみえた。「ばかにしてやがらア」とか、「どうりで、カツドウみてえだとおもつたよ」とか、ブツブツ云いながら五人八人とちらばつていったが、私にもわからなかつた。

しかしその翌晩からは、私たちの近所では「非常線」ごっこはやらなくなつた。それでも——井戸に毒をいれた——というわさなどはまだつづいて、私の同居している福田の内儀さんなどは、植物園の池から水を汲んで、こわれた塀のあいだから、しばらくは出はいりしていた。

四

たしか七日めだつた。私たちは植物園の、例の赤すじのある提灯がゆれた築山のむこうかげにあつまつていた。園内にはもうだいぶ人かげが少なくなつていたが、それでも木だちのなかにはむしろを張つて鍋釜などならべて

いる罹災者世帯やがいくつもあつたり、何ということなしに芝生のうえや、ベンチやにゴロゴロしている人影がたくさんあつた。

さいしよあつまった人間は十人くらいだった。よくおぼえているのは新工場の一階印刷室の紙差工高田幸松と、私らと同じ二階の植字工大島武二郎の二人だ。久堅支部員で同じ二階のT・S・T・M・M・Oなどのうちのどれかが加わっていたかも知れないが、しかしこのときの会合は新工場、すっかりつぶれた建物のうちの、各科の代表があつまつたのだから、私にも見知らない顔が多かつた筈である。

もちろんあつまりの目的は——あの建物のつぶれ方はふつうではない、犠牲者に対して会社はその点充分な弁明をすべきである。慰しや料もただの金一封では承知できない——という、つぶれた工場あとをかたづけながら、みんなのあいだにばくはつしかけている不満を代表して、ちゃんとした形にまとめようということにあつた。

「七分という人、あるいは三分という人、いろいろありますが……」

高田幸松が座長になっていた。板裏をはいたズボン

あぐらにくんで、指をくみあわせた掌の背をひざにおしつけての格好であつた。小さい男で、ネバっこい調子で喋べつた。三十くらいで世帯持だつたが、大進会の幹事で、印刷場での人望家であつた。

「アツというまもありやしねえ……」

「——七分なんぞ……」

私も三分か五分だと思つていた。初震から倒かいするほどまでの時間についてまちまちだったが、二階から一ばんさきにかけてしたゲラ刷り屋が、出口でつぶされて死んでいたこともわかつていた。また鉄筋の建物が五分や十分でツブれるものではないということも一週間のうちにみんなに解つていた。元来あの建物の地盤は田甫だつたが、基礎工事がよくなかつたのではないか？ 某組の請負だつたというが、警視庁の監督官が一杯のまされたんじやないか？ とかいう噂までしていたが、つまるるところまだ一度も会社側の弁明もなかつたのはつきりしたことはわからずにいた。

みんな口々にしゃべつていた。どんな風に話すすんだか、私の記憶もほとんどないが、私はたしか——会社の掲示の文句は不当だ、あれは止めさせなくてはいいかん

——という意味を云ったようだった。そして私の説に高田が同意したかどうか記憶がないが、それはこういうことだった。文句はおぼえないが、会社の掲示は、こんどの即死者四十三（或は四十四）名と、重傷者百（？）名の出来事を、すべては天災による犠牲者であるという風に書いて掲示した。遺族にもそう通知したようであったが、ことに私たちの活版部では怒っているものが多かったのである。

「——座長はどうなんだ、座長は」

ときどき大島武二郎がからだをゆすつて高田の態度をなじるように云っていた。くろい作業衣を着た大島は、おそろしく肥っている男で、そのくせにせっかちな男だった。それに彼も大進会員だったとおもうが、高田とはじつこんだったせいもあるう。

高田は非常にまじめに黙りこんでいた。それは事態を考えつめてというよりは、彼の立場を失うまいとする意味で慎重だったようだ。彼の立場というのは大進会の立場であるが、この会には職長たちも入っていて、ふつうの労働組合的なものではなかった。なぜだか私は当時の彼や大進会のことを「黄色労働組合」とか「黄色ボス」

などと云っていたのをおぼえている。そして震災前から私も高田の存在を知っており、彼ももちろん私らを知っていたにちがいない。こんどのことでは大島をとおして久堅支部の方で接近していったが、まだ高田は私らに対する警戒をうしなつていなかったことは事実であった。

「——ストライキ……」

そんな言葉も何度かとびだした。三階の校正室は職工とはちがうというほこりをかねてもつていたが、こんどのことでは犠牲者も多かったし激昂げっこうしていた。あの築山のおかげで円座をつくって一時間あまりいたようだ。議事の進行は記憶にないが、何だかを「会社にかけあえ」ということになっていった。そして私たちの円座のうしろにはききつたえた連中が、だんだんにあつまつてきて二三十人もいたようだった。じつさいあの十日間ばかりは、つぶれた新工場の四百人ばかりは不安な状態にあった。他の工場はおかまいなしに操業させられたし、私らは人夫みたいなことをしていても、熟練工としての賃金をくれるかどうかかわからない。そればかりか工場がないとすると、かくしゅ 賊首になるかも知れなかった。それに久堅支部員から二人の即死者と数人の重傷者をだして、それぞれ

に私たちは組合として遺族のうちを廻っていたが、その荷もおもかった。

「オイ、憲兵がきた……」

するとだれかがそう云った。さいしょ私らは憲兵のくるのがどういふわけか？ またどうしてくるといけないのか？ それさえちよつとわからぬようだった。しかしめいめいに腰をあげてそつちをみたとき、私も急に怖くなつてきた。ちょうど正門からはいつてくる砂利道じやり、すこしのぼり坂になつた砂利道のうえを、歩調をそろえたかけ足で兵隊がやつてくる。うつむきがちにザツザツと靴をならせて——。三人だつたか、五人だつたかはつきりわからぬが、二人ばかり銃をかついでいたような印象がある。もつとも憲兵が銃をかつがぬとすると、銃は私の錯覚かも知れない。

「——逃げたがいい」

高田が私の顔をみてそう云つたようだ。みんなはめいめにちらかりながら逃げていた。私も板裏草履いたづらぢりを握つたまま、大島と一緒に裏門から逃げだした。

私たちは「戒厳令」ということについてまるで知識をもつていなかった。しかしあの場合、会社が密告しなけ

れば憲兵が知るはずがないと云つて、みんなで腹をたてた。その築山のかげのあつまりは、ひざしの印象からして午前だったとおもうが、その夕方まで私らはどうしていたろう？ もちろん会社にいく筈はないし、私の借りている二階にでもいたのだろうか。私の六畳にはいつも久堅支部員のだれかがきていた。一日以来会社の弁当屋は中止だったが、私たちはセト火鉢の灰をあけて、かわりばんこに玄米をついた。——ひるでもよるでも、牢屋はくらしい。——つきながら私たちはそんな唄をよくうたった。

その夕方、私は大島と二人で高田の家へ行った。高田の家は工場の構内にくついている、ちよつとした門がまえで、私らなかまではめづらしい家に住んでいた。門をはいって石のある路地のような家と家とのあいだをゆくと、小さいだが玄關の格子がみえる。そのときは、その格子が半分ばかりあいていて、あがり口に膝をついてかしくまっている高田の顔がこつちからみえた。そして彼が眼顔でしらせたかも知れなかつたが、私たちは何気なく入口まで行ってしまった。するとそこに劍のながい兵隊がたつていた。大島が、

「あ、あッ」

と云つて、くるツと踵きびすをかえした。私もそうした。すると玄関をでてきた憲兵の音が、

「おい、おい——」

とよびかけながら、敷石の上を靴音響かせながら二つ三つかけてきた。私たちは門の外へとびだして、一散に長屋町の路地に逃げこんだ……。

……………

以上が大震災で死にそこねた私の記憶のあらましである。今日一二の記録をみれば私の印象や記憶は時間的にくいちがいがあつたりするようだが、その点かまわず書いた。私たちの新工場が何でそんなに早くつぶれたか？それは今日もまだわからずじまいである。私たちの会社への抗議も、そのときはそれでおさえつけられてしまった。下町方面の印刷工場が焼けて、私たちの工場は忙しかつたために、餓首にはならなかつたが、同じ構内の他の工場へ三人五人と配ぞくされてちりぢりになった。私たちの久堅支部はそれ以来、月に一回くらいは富坂署の特高がきて、支部員一人ずつを、会社の構内にある請願巡査詰所のボックスによびいれて首実検するようなあつぱ

くをうけた。

しかし読者諸君！ 若しこの小説のなかに入れることが出来るなら、みせてあげたい写真が一枚ある。それはその翌年の九月一日の一周忌に、会社構内の背後にある光円寺の構内で、大きな木標もくひょう、新工場犠牲者四十三名の名をつらねた記念碑（いまは石になっている）のままで、私たち、当時憲兵においちらされた職工ばかりがならんでうつつている。一ばん最初に高田幸松、つぎが私、四ばんめに大島武二郎が大きな腹をつきだしてたつている。そしてこの記念碑を会社に建てさせ、遺族や不具になつた重傷者たちに相当な待遇をさせ、会社従業員全部がH Pクラブ（のちの出版労働組合）という組合をそしきたのは、震災から九ヶ月めの、大正十三年五月の争議に、私らが勝利することができたからであつた。

歴史は学者の机の上ではつくられない。朝鮮人をぎやくさつした力は、同時に日本のはたらく人々をおさえた力であつたということを、私たちは書物や新聞記事だけで知ろうと思つてはならないのだ。

追憶

二〇一六年三月二日 第一稿 公開

【解題】

〈初出〉『文芸春秋』第二四年第九号（一九四六年二月号）

※ 攔筆は「一九四六年」。目次では宮本百合子の「風知草」と並び（創作）として掲載されている。

〈単行本〉『がま』（高島屋出版部、一九四七年六月）

※ 装幀は小磯良平による。

『追憶』（高島屋出版部、一九四八年六月）

※ 『がま』と同一の紙型を使用。装幀は宮本三郎による。

『あぶら照り』（新潮社、一九四八年一〇月）

※ 攔筆は「一九四六年九月」。

※ 本稿では『あぶら照り』を底本とし、各版を参照して校訂した。なお、底本はルビ無しで、難読と思われる漢字に校訂者がルビを付した。

入力・校訂者 Ⅱ 和田崇